

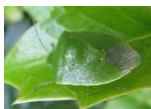
病害虫発生予察情報予報第 6 号（10 月の予報）

佐賀県農業技術防除センター

I. 予報の概要および各作物の特記事項

作 物 名	病 害 虫 名 ^{注1)}	10 月の予想発生量 ^{注2)} 平年比	予報対象の病害虫 (抜粋)
水 稻 (普通期)	トビイロウンカ	並	
	1. トビイロウンカ 今後も気温が高くウンカ類の発生に好適な気象予報となっていることから、圃場ごとの発生状況をよく観察し、発生が多い場合は早急に薬剤防除を実施する。		
大 豆	ハスモンヨトウ	やや多	 カメムシ類
	カメムシ類	多	
	1. カメムシ類 被害を防ぐため、圃場ごとの発生状況や大豆の生育状況を確認し、子実肥大中期（開花 40～50日後）までに防除を徹底する。発生が多い圃場では、7～10日間隔で2～3回防除を行う。		
	2. ハスモンヨトウ 圃場ごとの発生状況をよく観察し、幼虫の寄生が多いまたは加害が続いている場合は追加防除を実施する。		
イチゴ (本圃)	うどんこ病	少	 炭疽病 汚斑型病斑
	炭疽病	やや多	
	ハダニ類	多	
	アブラムシ類	やや多	
	1. ハダニ類 多くの圃場で発生が確認されている。多発すると防除が困難になるため、発生初期に防除を徹底する（令和8年8月5日付病害虫対策資料第11号参照）。		
	2. 炭疽病 天井ビニル被覆まで本病に対する薬剤防除を継続する。台風等の強風雨により急激に発病が増えるおそれがあるため、長雨や台風襲来が予想される場合には、必ず予防散布を行う。予防散布が行えなかった場合には、降雨後速やかに薬剤散布を実施する。		
3. 次年産親株の炭疽病対策 次年産での炭疽病の発生を抑えるため、発病のない圃場から健全株を確保する。特に、育苗期に発生が認められた圃場では、優良原種苗等への更新を行う。			
キュウリ	べと病	やや少	 黄化えそ病
	うどんこ病	やや少	
	褐斑病	多	

作物名	病虫害名 ^{注1)}	10月の予想発生量 ^{注2)} 平年比	予報対象の病虫害 (抜粋)
キュウリ	アザミウマ類	やや多	 退緑黄化病
	コナジラミ類	多	
	1. 褐斑病 発病が多くなってからでは防除が困難となるので、発生初期から予防散布を徹底する。下葉の老化葉や被害葉は伝染源となるので、圃場外に持ち出して処分するなど圃場衛生に努める。 2. ミナミキイロアザミウマ：黄化えそ病、タバココナジラミ：退緑黄化病 ウイルス病の症状が見られた株は速やかに抜き取り、圃場外に持ち出して適切に処分するとともに、媒介虫の薬剤防除を徹底する。ウイルス病未発生 of 圃場においても、媒介虫の侵入防止対策を徹底するとともに、定期的に薬剤防除を実施する。		
アスパラガス	茎枯病	やや少	 ハダニ類
	褐斑病	やや少	
	斑点病	並	
	アザミウマ類	やや多	
	ハダニ類	多	
	1. ハダニ類 一部のほ場で発生が増加している。多発生すると防除が困難となるので、発生初期に防除を徹底する。 2. アザミウマ類 虫見板への払い落とし等により、発生状況を確認し早期防除に努める。 一部地域で、ミカンキイロアザミウマの発生が確認されている。発生種によって薬剤の感受性が異なるので、防除効果を確認しながら薬剤選定する。 3. 薬剤散布時の注意点 茎葉が繁茂すると薬剤が茎葉内部や株元まで到達しにくいので、不要な茎葉は整理する。またかけムラが生じるのを防ぐため、ノズルを株内に差し込み散布したり、株の両側から散布するなど十分な薬量で丁寧に散布する。		
タマネギ	1. ベと病 苗床での感染を防ぐため、育苗期から予防防除を行う。		
野菜共通	チョウ目害虫 (ハスモンヨトウ、 オオタバコガ、 シロイチモジヨトウ)	多	 シロイチモジヨトウ
	フェロモントラップでの誘殺数は平年比やや多から多で推移しており、今後も発生が増加するおそれがある。各圃場での発生状況を確認し、若齢期に防除する。また、本圃定植前に苗での防除を徹底する。		

作物名	病虫害名 ^{注1)}	10月の予想発生量 ^{注2)} 平年比	予報対象の病虫害 (抜粋)
果樹全般	果樹カメムシ類	並	 ツヤアオカメムシ
	1. 果樹カメムシ類 発生量や飛来状況は地域や園によって異なるため、園内外をよく観察し、飛来が確認された場合には、直ちに防除を行う（令和8年7月13日付け病虫害発生予察注意報第3号および令和8年7月30日付け病虫害対策資料第10号参照）。		
カンキツ	ミカンハダニ	<u>多</u>	  ミカンハダニ ミカンサビダニ
	チャノキイロアザミウマ	<u>やや多</u>	
ナシ	1. ミカンハダニ 発生が多い園では薬剤散布を徹底する。貯蔵品種では、寄生した果実を貯蔵庫内に持ち込むと貯蔵庫内で増殖して被害を受けるため、収穫前の薬剤散布を徹底する。		
	2. かいよう病 台風の襲来等強風雨が予想される場合は、襲来7日前～前日までに必ず薬剤散布を行う。なお、罹病しやすい品種では、感染防止のため園内の発病葉および発病果実を切除し、埋却または園外に持ち出し処分する。また、剪定時には罹病部を必ず切り取り処分する。		
ブドウ	3. ミカンサビダニ 園内及び周辺の園で新たな被害を認めた場合は、早急に薬剤を散布する。特に、前年に被害が多発した園や放任園等に隣接する園では防除を徹底する。		
	4. 果実腐敗対策 傷果、日焼け果や裂果は果実腐敗の原因となるので、収穫時に取り除き処分する。なお、黒点病の発生が多い園の果実は軸腐病を発病しやすいので、発病の少ない園の果実とは区分して収穫・貯蔵する。また、果実に傷をつけないよう丁寧に扱うとともに、降雨・結露などで濡れている果実は収穫しないようにする。腐敗防止剤は、収穫7～10日前に薬液が霧状になるノズルを用いて、果実表面にムラがないように丁寧に散布する。		
キウイフルーツ	5. そうか病 本年は発生の多い園が確認された。そうか病菌は葉や枝上の病斑で越冬するため、剪定時に罹病部を必ず切り取り処分する。		
	1. 黒星病、炭疽病 来年の伝染源を減らすため、収穫終了後の防除を徹底する。また、落葉した罹病葉は本病の伝染源となるので、埋却または園外に持ち出し処分する。		
キウイフルーツ	1. べと病 本病による早期落葉の防止及び園内の菌密度低下のため、収穫終了後の防除を徹底する。また、落葉した葉は本病の伝染源となるので、埋却または園外に持ち出し処分する。		
	1. かいよう病 収穫期頃から、本病菌の生育に好適な気温となるので、感染防止のため発病の有無にかかわらず全ての園において、収穫終了直後から銅水和剤を定期的に散布する。		

作物名	病虫害名 ^{注1)}	10月の予想発生量 ^{注2)} 平年比	予報対象の病虫害 (抜粋)
キク	白さび病	並	
	アザミウマ類	並	
	アブラムシ類	<u>やや多</u>	
	ハダニ類	<u>やや多</u>	
	ハモグリバエ類	<u>やや多</u>	
	チョウ目害虫	<u>多</u>	
1. チョウ目害虫 フェロモントラップでの誘殺数が多く推移している。幼虫の齢が進むと薬剤の効果が低下するため、早期発見に努め、若齢幼虫のうちに防除を徹底する。			チョウ目害虫によるキクの被害

注1) 病虫害名に網掛けをしたものについては、予報の根拠とした内容を記載しています。

注2) 予想発生量については、平年との比較により記載しているため、実際の発生量とは相違を生じる場合があります。例えば、例年の発生量が少ない病虫害について「平年より多い」と予想した場合であっても、実際の発生量は多くない場合があります。

注3) 防除対策については「佐賀県病虫害総合防除計画」も参照してください。

病虫害総合防除計画掲載アドレス

https://www.pref.saga.lg.jp/ki_ji003101844/index.html 二次元コードー



Ⅱ. 予報の内容・根拠等について

予報内容（来月の予想発生量）

- 平年（過去 10 年間）と比較し「少、やや少、並、やや多、多」の 5 段階で示しています。
なお、少発生が予想される病害虫等については、予報の概要のみの記載となる場合があります。

予報内容の根拠

- 農業技術防除センターが実施する県内各地での調査、防除員の調査、予察灯・トラップでの誘殺状況調査等に基づく発生現況、気象予報からみた病害虫の発生条件等を基に、関係者による発生予察会議で決定します。
○ 発生現況および気象条件が来月の病害虫の発生に及ぼす影響については、（－）：少発生、（－～±）：やや少発生、（±）：並発生、（±～＋）：やや多発生、（＋）：多発生として示しています。

防除上注意すべき事項

- 各病害虫を防除する上で特に注意すべき事項等を記載しています。なお、全般的な防除対策については「佐賀県病害虫総合防除計画」をご参照ください（3 ページの注釈にリンクがあります）。

写真

- 1 ～ 3 ページ目：予報で対象とした病害虫を抜粋して掲載しています。

10 月の気象条件

- 病害虫の発生に関与する 10 月の気象条件については、福岡管区気象台発表の 1 ヶ月予報（令和 8 年 9 月 24 日）を基に、「気温：平年より高い」、「降水量：平年並」と判断しています。

気象予報による要素別確率（％）及び病害虫の発生に関与する気象条件

要素	1 ヶ月予報における 10 月の気象予報（確率予報％）			病害虫の発生に関与する気象条件（平年比）
	低い（少ない）	平年並 （佐賀市の平年値）	高い（多い）	
気温	10	30（19.1℃）	60	高い
降水量	40	30（90.1 mm）	30	並

Ⅲ. 10月の予報

水稻（普通期）

[【概要に戻る】](#)

定期調査：48 圃場

調査日：9月14～17日

1. トビイロウンカ

1) 予報の内容

発生量：平年並

2) 予報の根拠

(1) 発生状況

① 定期調査（図1参照）

発生株率 0.8%（平年 13.2%、前年 2.6%）

平年比：やや少（－～±）

(2) 10月の気象予報

気温は高く、多発生の条件（＋）

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 今後も気温が高くウンカ類の発生に好適な気象予報となっていることから、圃場ごとの発生状況をよく観察し、発生が多い場合は早急に薬剤防除を実施する。

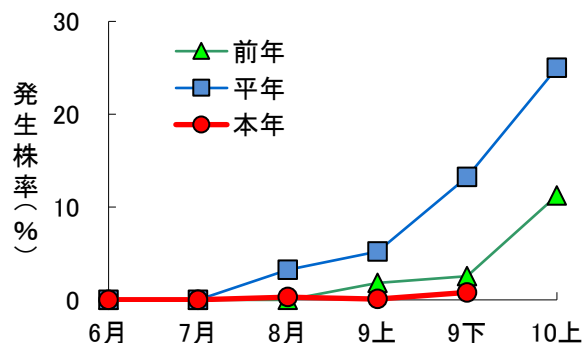


図1 普通期水稻でのトビイロウンカの発生推移

大豆

[【概要に戻る】](#)

定期調査：22 圃場

調査日：9月14～17日

1. ハスモンヨトウ

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査（図1参照）

発生株率 5.5%（平年 5.2%、前年 1.8%）

平年比：並（±）

白変葉発生株率 1.2%（平年 1.1%、前年 0.4%）

平年比：並（±）

② トラップ調査（図2参照）

平年比：やや多（±～＋）

(2) 10月の気象予報

気温は高く、多発生の条件（＋）

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 各圃場での発生状況を確認し、白変葉が散見され始めたら防除を実施する。
(2) 防除の際は、薬剤のかけむらがないう規定の範囲で十分量を散布する。
(3) 圃場ごとの発生状況をよく観察し、幼虫の寄生が多いまたは加害が続いている場合は追加防除を実施する。

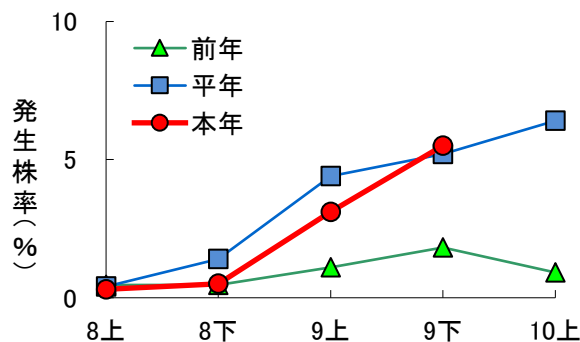


図1 大豆でのハスモンヨトウの発生推移

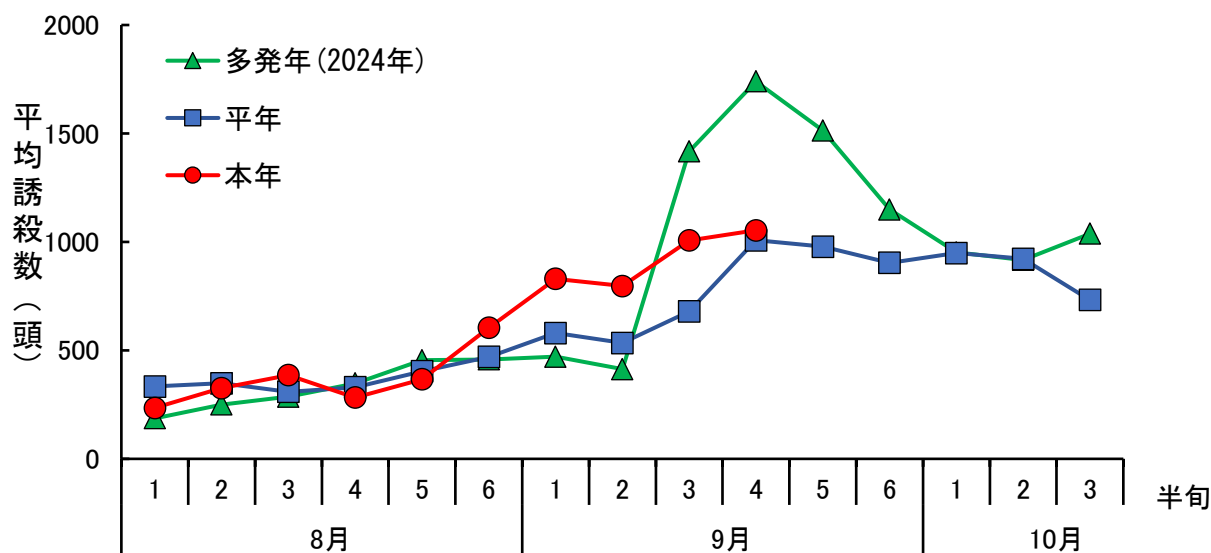


図2 フェロモントラップによるハスモンヨトウ雄成虫の半旬別誘殺数
(農業共済組合、農業試験研究センター調査による県内8地点の平均誘殺数)

2. カメムシ類 (アオクサカメシ、イチモンジカメシ、ホソヘリカメシ、ミナミアカメシ等)

1) 予報の内容

発生量: 平年より多い

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査 (図1 参照)

発生株率 0.5% (平年 0.3%、前年 0.6%)

平年比: やや多 (±~+)

(2) 10月の気象予報

気温は高く、多発生の条件 (+)

3) 防除上注意すべき事項

(1) 防除にあたっては、薬剤が莢によくかかるように散布する。

(2) 被害を防ぐため、圃場ごとの発生状況や大豆の生育状況を確認し、子実肥大中期 (開花 40~50 日後) までに防除を徹底する。発生が多い圃場では、7~10 日間隔で 2~3 回防除を行う。

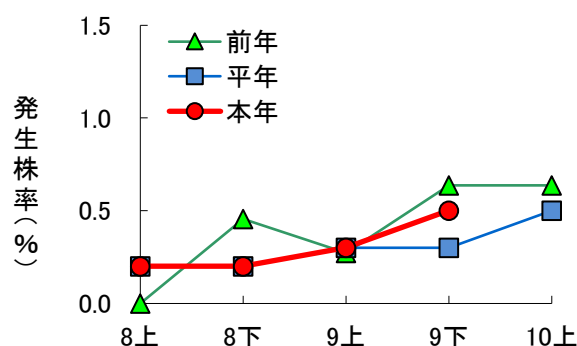


図1 大豆でのカメムシ類の発生推移

イチゴ (本圃)

[【概要に戻る】](#)

定期調査 10 圃場、防除員 6 圃場

調査日: 9 月 14~18 日

1. 炭疽病

1) 予報の内容

発生量: 平年よりやや多い

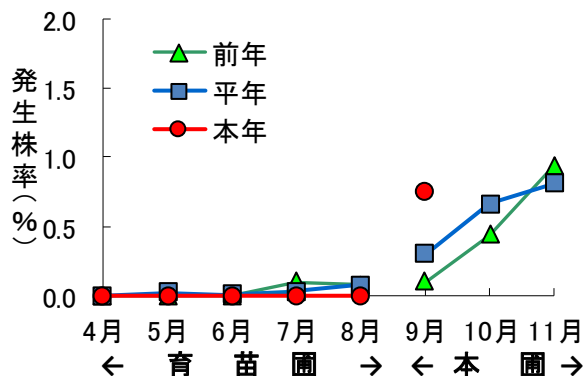


図1 炭疽病の発生推移

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査 (図1 参照)

発生株率: 0.75% (平年 0.30%、前年 0.10%)

平年比: やや多 (±~+)

(2) 10月の気象予報

降水量は並で、並発生の条件 (±)

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 定期的な薬剤防除を行い、特に強風雨や台風の襲来が予想される場合は、予防防除を徹底する。
- (2) 灌水や管理の際に葉の汚斑型病斑や立枯れ等の発病株を確認し、これらを認めた場合は、早急に圃場外に持ち出し適切に処分する。

2. ハダニ類

1) 予報の内容

発生量: 平年より多い

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査 (図1 参照)

発生株率: 15.8% (平年 5.9%、前年 0.

平年比: 多 (++)

(2) 10月の気象予報

気温が高く、多発生の条件 (+)

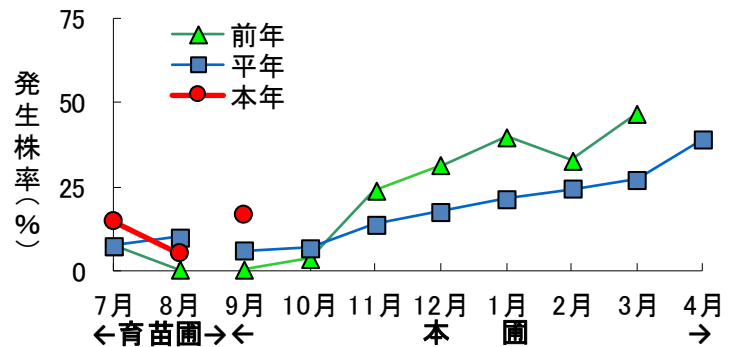


図1 ハダニ類のイチゴでの発生推移

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 薬剤防除の際は、下葉や葉裏まで薬液が付着するように十分量を丁寧に散布する。
- (2) 天敵 (カブリダニ類) を利用する圃場では、天敵への影響が少ない薬剤を用いてハダニの密度を0頭レベルに抑えた後に、天敵を放飼する。

3. アブラムシ類

1) 予報の内容

発生量: 平年よりやや多い

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査 (図1 参照)

発生株率: 2.8% (平年 3.7%、前年 2.5%)

平年比: 並 (±)

(2) 10月の気象予報

気温が高く、多発生の条件 (+)

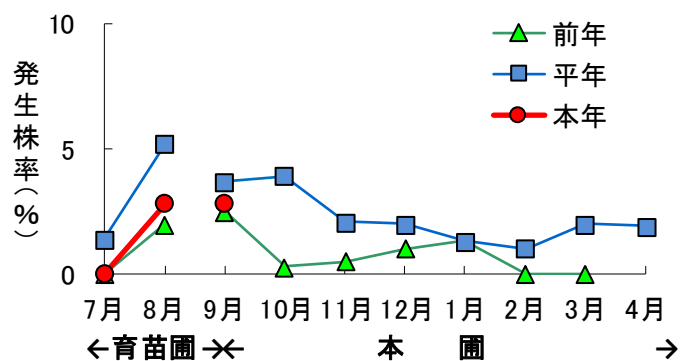


図1 アブラムシ類のイチゴでの発生推移

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 圃場周辺の雑草は本虫の発生源となるため、除草を行う。下葉や葉裏まで薬液が付着するように十分量を丁寧に散布する。

キュウリ

[【概要に戻る】](#)

定期調査5圃場、防除員4圃場

調査日：9月14～18日

1. ベと病

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少ない

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査（図1参照）

発生株率：0.6%（平年4.0%、前年2.2%）

平年比：やや少（－～±）

(2) 10月の気象予報

降水量は並で、並発生の条件（±）

3) 防除上注意すべき事項

(1) 適正な湿度管理に努める。

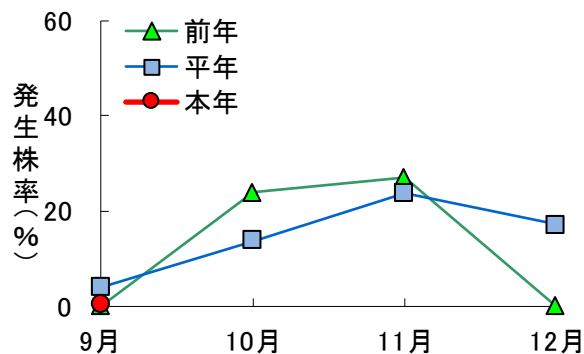


図1 キュウリベと病の発生推移

2. 褐斑病

1) 予報の内容

発生量：平年より多い

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査（図1参照）

発生株率：8.9%（平年1.1%、前年44.4%）

平年比：多（+）

(2) 10月の気象予報

降水量は並で、並発生の条件（±）

3) 防除上注意すべき事項

(1) ハウスの換気を十分に行い、灌水過多を避ける。

(2) 発病が多くなってからでは防除が困難となるので、少発生のうちから定期的に薬剤防除を行う。

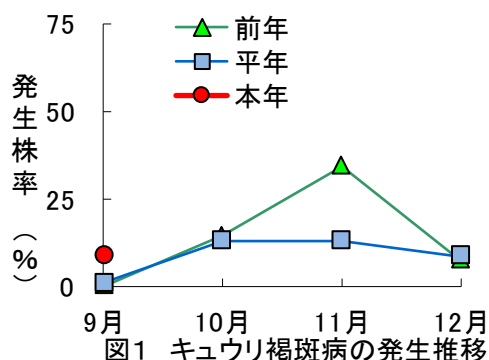


図1 キュウリ褐斑病の発生推移

3. アザミウマ類

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査（図1参照）

発生株率：1.7%（平年1.9%、前年9.4%）

平年比：並（±）

(2) 10月の気象予報

気温が高く、多発生の条件（+）

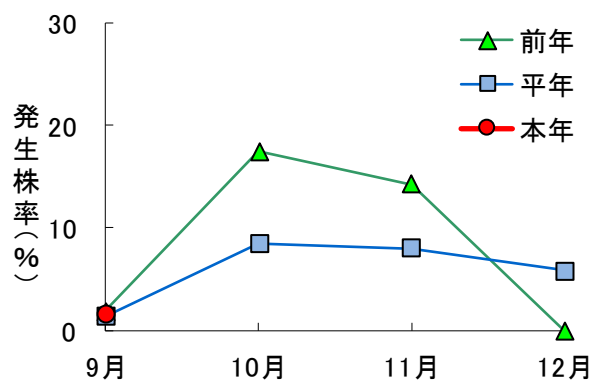


図1 アザミウマ類のキュウリでの発生推移

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 黄化えそ病の症状(新葉の黄化・葉脈透過、葉のモザイク・えそ斑点等)が見られる株は速やかに抜き取り、圃場外に持ち出して適切に処分するとともに、媒介虫の薬剤防除を徹底する。
- (2) 黄化えそ病が未発生圃場においても、アザミウマ類の侵入防止対策を徹底するとともに、定期的に薬剤防除を実施する。

4. コナジラミ類

1) 予報の内容

発生量：平年より多い

2) 予報の根拠

(1) 発生の実況

① 定期調査(図1参照)

発生株率：17.8% (平年 11.2%、前年 38.9%)
平年比：やや多(±～+)

(2) 10月の気象予報

気温が高く、多発生の条件(+)

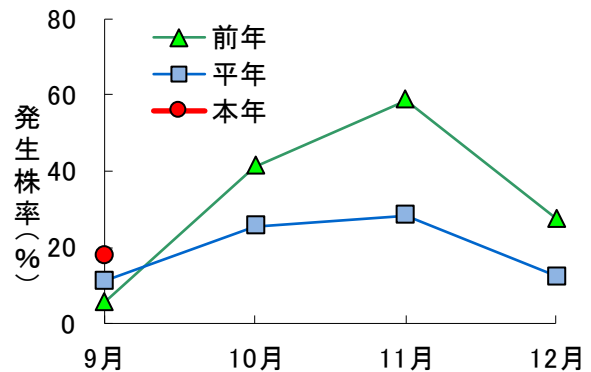


図1 コナジラミ類のキュウリでの発生推移

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 退緑黄化病の症状(葉脈間退緑、葉のモザイク等)が見られる株は速やかに抜き取り、圃場外に持ち出して適切に処分するとともに、媒介虫の薬剤防除を徹底する。
- (2) 退緑黄化病が未発生圃場においても、コナジラミ類の侵入防止対策を徹底するとともに、定期的に薬剤防除を実施する。

アスパラガス

[【概要に戻る】](#)

定期調査：8圃場

調査日：9月14日～18日

1. 褐斑病

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少ない

2) 予報の根拠

(1) 発生の実況

① 定期調査(図1参照)

発生株率：22.5% (平年 50.3%、前年 39.4%)
平年比：少(－)

(2) 10月の気象予報

降水量は並で、並発生の条件(±)

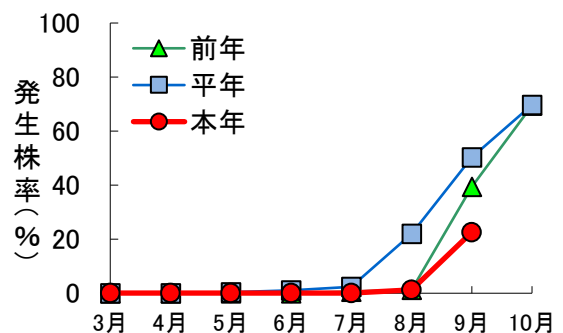


図1 アスパラガス褐斑病の発生推移

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 通風を図るため、降雨時以外は施設開口部を開放する。
- (2) 感染してから発病までの潜伏期間が20～30日と長いことから、発病前からの3週間間隔を目安とした予防散布を基本とする。なお、既発生ほ場及び降雨日が続く場合は散布間隔を短縮する。

2. アザミウマ類

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査（図1参照）

発生株率：23.1%（平年 22.2%、前年 5.6%）

平年比：並（±）

(2) 10月の気象予報

気温は高く、多発生の条件（+）

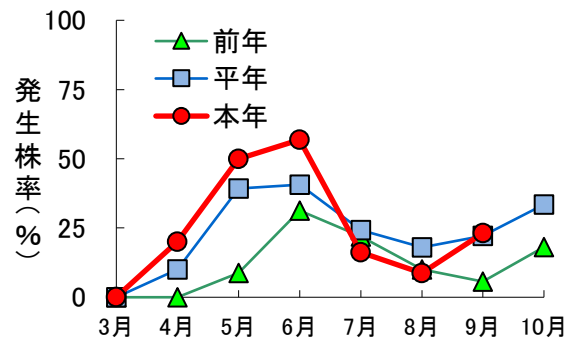


図1 アスパラガスでのアザミウマ類の発生推移

3) 防除上注意すべき事項

(1) 虫見板への払い落とし等により、発生状況を確認し早期防除に努める。

3. ハダニ類

1) 予報の内容

発生量：平年より多い

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査（図1参照）

発生株率：3.1%（平年 1.4%、前年 1.9%）

平年比：やや多（±～+）

(2) 10月の気象予報

気温は高く、多発生の条件（+）

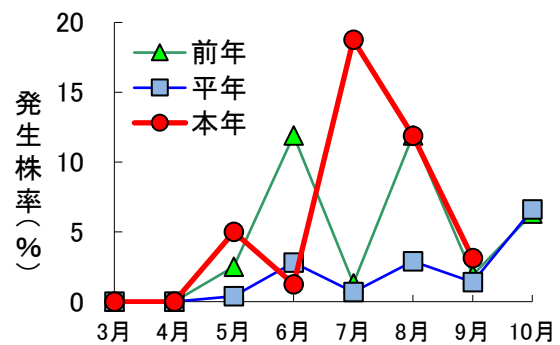


図1 アスパラガスでのハダニ類の発生推移

3) 防除上注意すべき事項

(1) 多発すると防除が困難となるので、虫見板への払落としなどにより発生を確認し、発生初期に防除を徹底する。

(2) 薬剤のかけムラがないように丁寧に散布する。

野菜共通

[【概要に戻る】](#)

1. チョウ目害虫（ハスモンヨトウ、オオタバコガ、シロイチモジヨトウ）

1) 予報の内容

発生量：平年より多い

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査（図1, 2参照）

作物名	食害株率 (%)	平年比	平年値 (%)	前年値 (%)
イチゴ	0.3	やや少（±～+）	1.2	2.0
アスパラガス	16.3	多（+）	0.1	0

② フェロモントラップによる9月の誘殺数

ハスモンヨトウは、平年よりやや多い（図3）。（±～+）

オオタバコガは、平年より多い（図4）。（+）

シロイチモジヨトウは、平年より多い（図5）。（+）

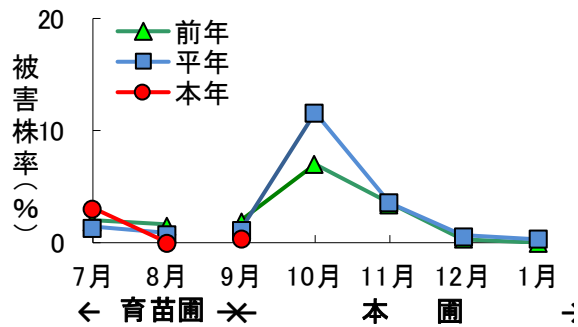


図1 チョウ目害虫によるイチゴの被害株率の推移

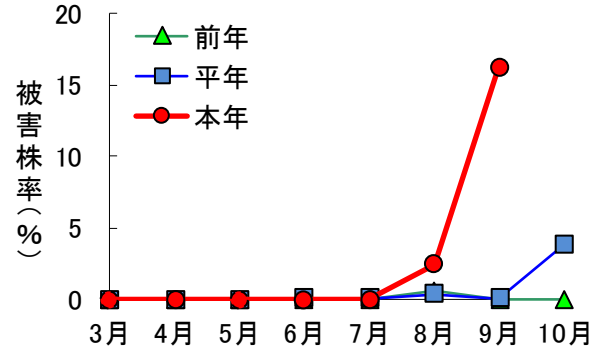


図2 チョウ目害虫によるアスパラガスの被害株率の推移

(2) 10月の気象予報

気温が高く、多発生の条件〈+〉

3) 防除上注意すべき事項

(1) 薬剤防除に当たっては、使用方法（収穫前日数等）を遵守し、虫体によくかかるよう丁寧に散布する。

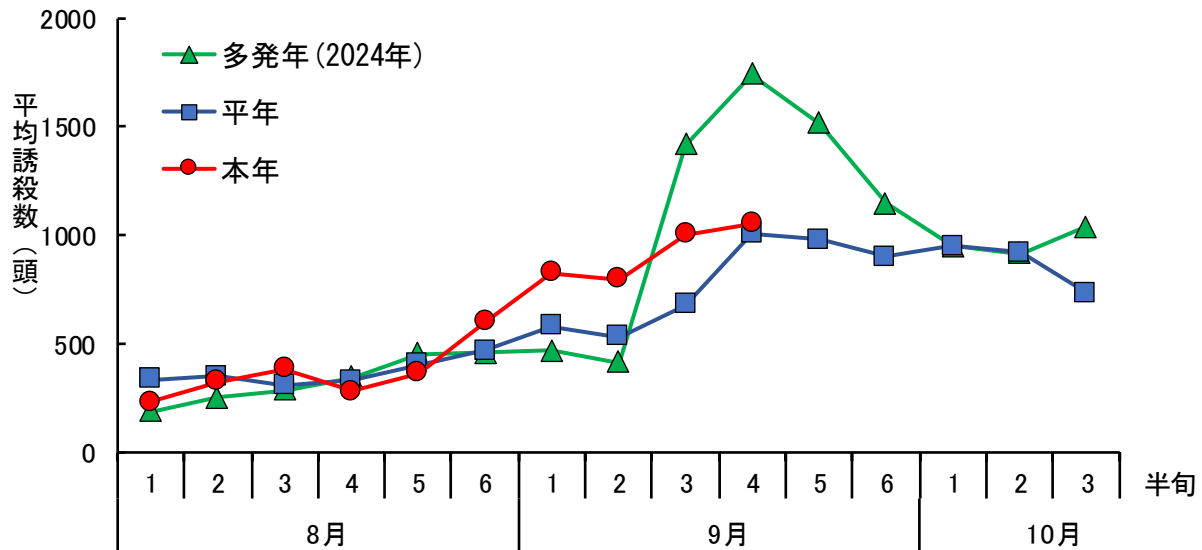


図3 フェロモントラップによるハスモンヨトウ雄成虫の半旬別誘殺数
(農業共済組合、農業試験研究センター調査による県内8地点の平均誘殺数)

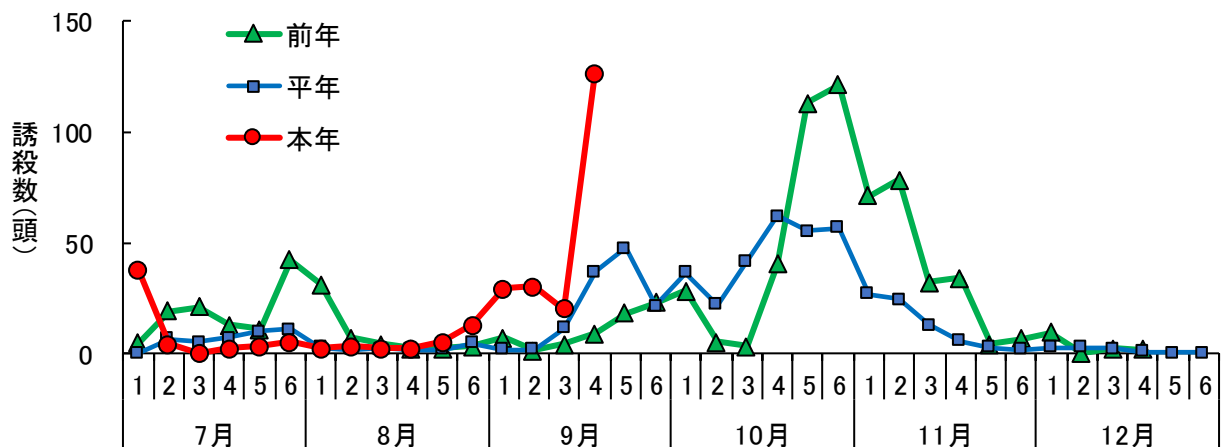


図4 フェロモントラップによるオオタバコガ雄成虫の半旬別誘殺数
(川副町・農業試験研究センター調査)

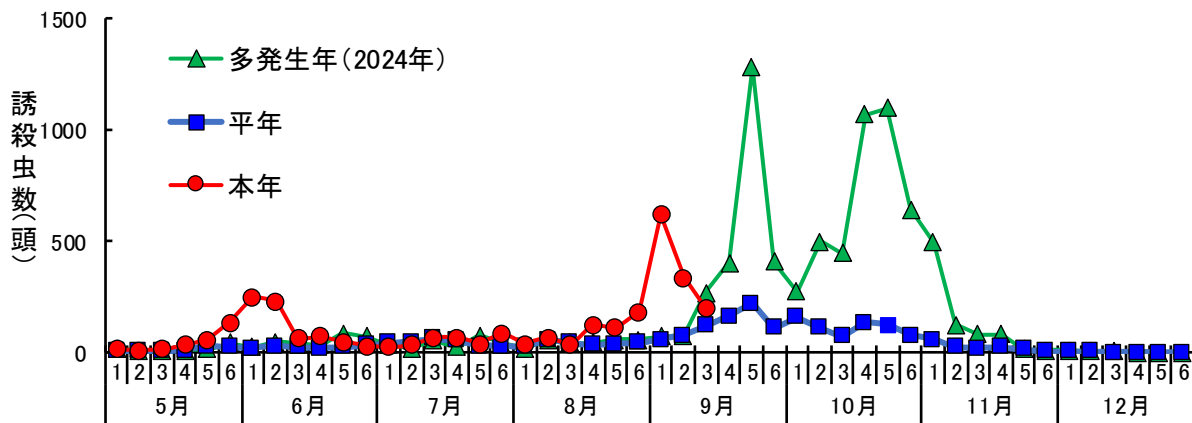


図5 フェロモントラップによるシロイチモジヨトウ雄成虫の半月別誘殺数
(川副町・農業試験研究センター調査)

果樹全般

[【概要に戻る】](#)

1. カメモシ類

1) 予報の内容

発生量：平年並

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 予察灯 (図1 参照) 平年比：やや少 (ー～±)

② フェロモントラップ (図2 参照) 平年比：並 (±)

(2) ヒノキ球果における寄生数 (図3、表1 参照、9月3～4日調査)

成幼虫数平均：2.0頭 (平年 18.2頭、前年 38.7頭) 平年比：やや少 (ー～±)

(3) 10月の気象予報

気温が高く、多発生の条件 (+)

3) 防除上注意すべき事項

(1) 発生量や飛来状況は地域や園によって異なるため、園内外をよく観察し、飛来が確認された場合には、直ちに防除を行う (令和8年7月13日付け病害虫発生予察注意報第3号および令和8年7月30日付け病害虫対策資料第10号参照)。

(2) ツヤアオカメモシは常緑樹の樹上で越冬する習性があり、カンキツ類の樹上でも越冬する。本虫が越冬のために飛来したカンキツ樹に果実が結実している場合は、収穫時まで果実が加害されるため樹上での寄生状況を必ず確認し、確認されたら薬剤を散布する。

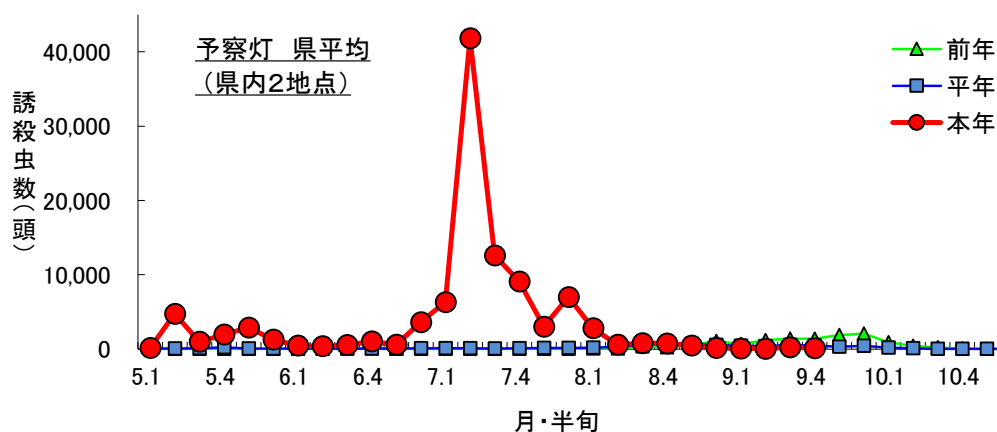


図 1 予察灯（佐賀市、小城市（果樹試験場調査））による果樹カメムシ類の平均誘殺数の推移

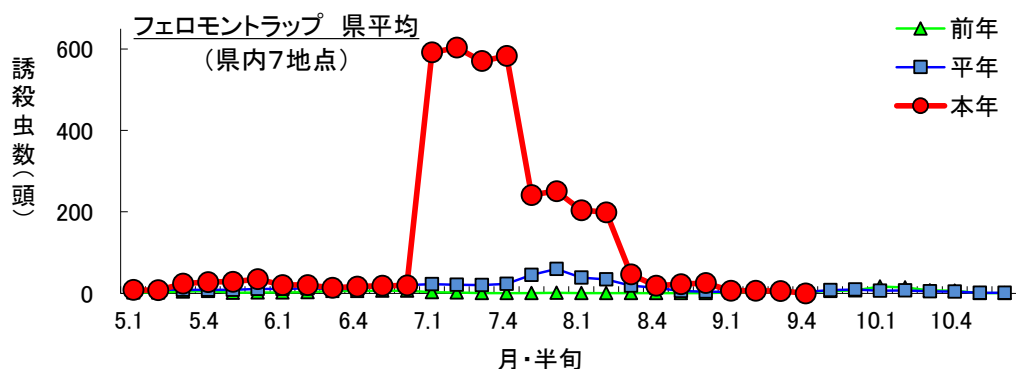


図 2 フェロモントラップ（鹿島市、伊万里市、唐津市浜玉町、基山町、太良町（病害虫防除員調査）、小城市（果樹試験場調査）、唐津市鎮西町（上場営農センター調査））による果樹カメムシ類の平均誘殺数の推移

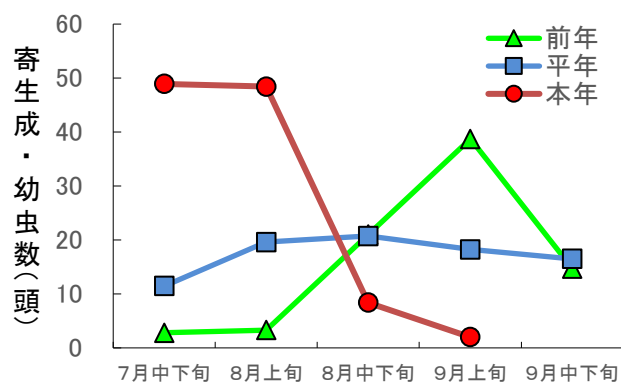


図 3 ヒノキ球果における果樹カメムシ類寄生虫数の推移

※ 9月上旬の調査で寄生虫数が減少したため、9月中下旬の調査は行っていない。

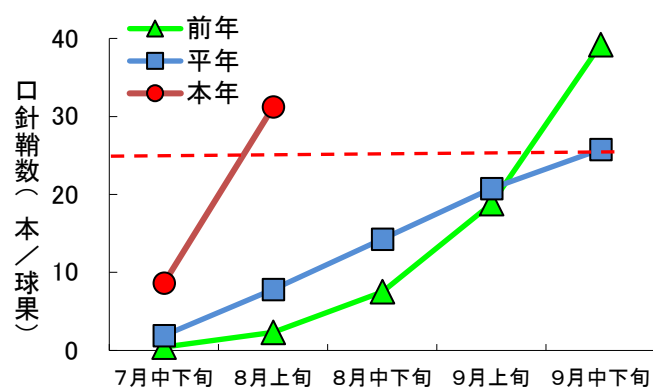


図 4 果樹カメムシ類によるヒノキ球果上の口針数の推移

※ 赤色の破線は果樹カメムシ類がヒノキ球果から離脱するとされる 25 本／果を示す
 ※ 令和 8 年は、8月上旬にヒノキ球果からの離脱の目安となる 25 本を超えたため以降の調査は実施していない。

表 1 ヒノキ球果における果樹カメムシ類の寄生虫数および口針鞘数（図3、4に関する地点別の状況）

No.	調査地点	ヒノキ球果における寄生状況 ¹⁾			ヒノキ球果における寄生状況 ¹⁾			ヒノキ球果 ²⁾ 着果程度	口針鞘数 ³⁾			
		8月中下旬			9月上旬				7月 下旬	8月 上旬	8月 中下旬	9月 ⁴⁾ 上旬
		成虫	幼虫	合計	成虫	幼虫	合計					
1	上 峰 町 堤	-	-	-	-	-	-	極少	-	-	-	-
2	神 埼 市 脊 振 町 倉 谷	-	-	-	-	-	-	極少	-	-	-	-
3	小 城 市 三 日 月 町 織 島	1	1	2	0	1	1	中	12.5	32.3	-	-
4	唐 津 市 佐 志	3	0	3	1	0	1	やや少	2.9	23.0	22.9	-
5	唐 津 市 浜 玉 町 平 原	-	-	-	—	—	-	極少	-	-	-	-
6	唐 津 市 北 波 多 成 淵	11	0	11	3	0	3	中	2.9	28.6	-	-
7	伊 万 里 市 大 川 町 川 西	1	0	1	1	0	1	やや少	4.8	26.0	-	-
8	伊 万 里 市 南 波 多 町 谷 口	8	0	8	2	0	2	中	11.6	26.1	-	-
9	伊 万 里 市 南 波 多 町 笠 椎	0	0	0	0	1	1	中	8.0	25.9	-	-
10	多 久 市 南 多 久 町	3	5	8	1	0	1	やや少	2.3	34.7	-	-
11	鹿 島 市 飯 田	4	3	7	4	0	4	やや少	5.4	59.4	-	-
12	鹿 島 市 音 成	2	2	4	0	0	0	やや多	39.8	-	-	-
13	太 良 町 江 岡	8	15	23	7	0	7	多	3.0	31.3	-	-
14	太 良 町 大 浦	17	8	25	0	1	1	多	1.8	24.3	27.1	-
	平 均	5.3	3.1	8.4	1.7	0.3	2.0	-	8.6	31.2	-	-
	平 年	-	-	20.7	-	-	18.2	-	1.9	7.8	14.3	20.7
	前年(R7年)	-	-	21.0	-	-	38.7	-	18.8	39.2	0.0	18.8

1) たたき落としによる調査

2) ヒノキ球果着果程度：福岡農総試の達観調査法に基づいて調査

- ・極少：一部の木では上部にも球果が見られるが、多くの木では上部にも球果がない。
- ・少：球果が全くない木も見られるが、多くの木の上部には球果がある
- ・やや少：球果が全くない木も見られるが、多くの木の上部には球果があり、一部の木では中央部にもみられる
- ・中：中央部まで球果が見られる木が多い
- ・やや多：多くの木では中央部までたくさんの球果が見られ、一部は下部にも球果がある
- ・多：下部まで球果が見られる木が多い
- ・極多：ほとんどの木で下部までたくさんの球果が見られる

3) 口針鞘数が1果当たり25本を超えるとヒノキ球果が餌として不適となりカメムシがヒノキ球果より離脱する傾向

4) 口針鞘数が8月下旬以降25本を超えたため、口針鞘数調査は終了した

※ヒノキ球果における寄生虫数、口針鞘数は地域等で差が大きいので、各地点の調査結果が必ずしも当該地域全体の状況を示すものではない。

カンキツ

[【概要に戻る】](#)

定期調査（8圃場）
調査日：9月15日～16日

1. ミカンハダニ

1) 予報の内容

発生量：平年より多い

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査（図1参照）

発生葉率：13.9%（平年6.7%、前年42.1%）

平年比：やや多（±～+）

(2) 10月の気象予報

気温は高く、降水量は並で、多発生の条件（+）

3) 防除上注意すべき事項

(1) 発生が見られる圃場、特に収穫まで期間のある晩生品種等では低密度時からの防除を徹底する。

(2) 殺ダニ剤に対する抵抗性の発達を避けるため、同じ系統の薬剤は年1回の使用とする。また、前年に使用した殺ダニ剤は使用しない。

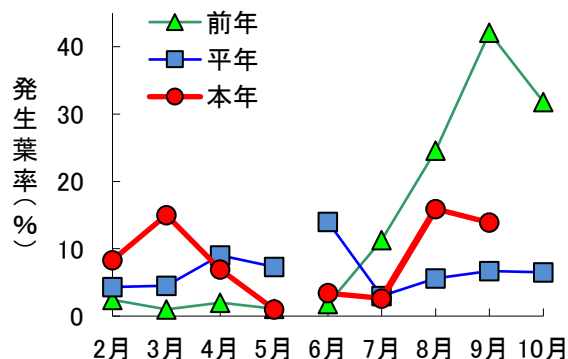


図1 カンキツ ミカンハダニの発生推移

2. チャノキイロアザミウマ

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査（図1参照）

発生果率：0.3%（平年0.1%、前年0.3%）

平年比：やや多（±～+）

② 黄色粘着トラップ（図2参照）

平年比：並（±）

(2) 10月の気象予報

気温は高く、降水量は並で、多発生の条件（+）

3) 防除上注意すべき事項

(1) 被害が確認され始めたら早急に薬剤を散布する。

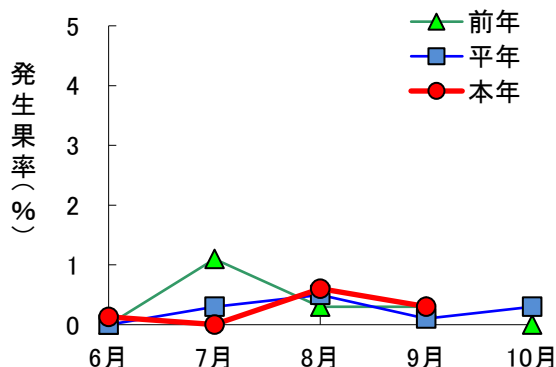


図1 チャノキイロアザミウマによる被害果の発生推移

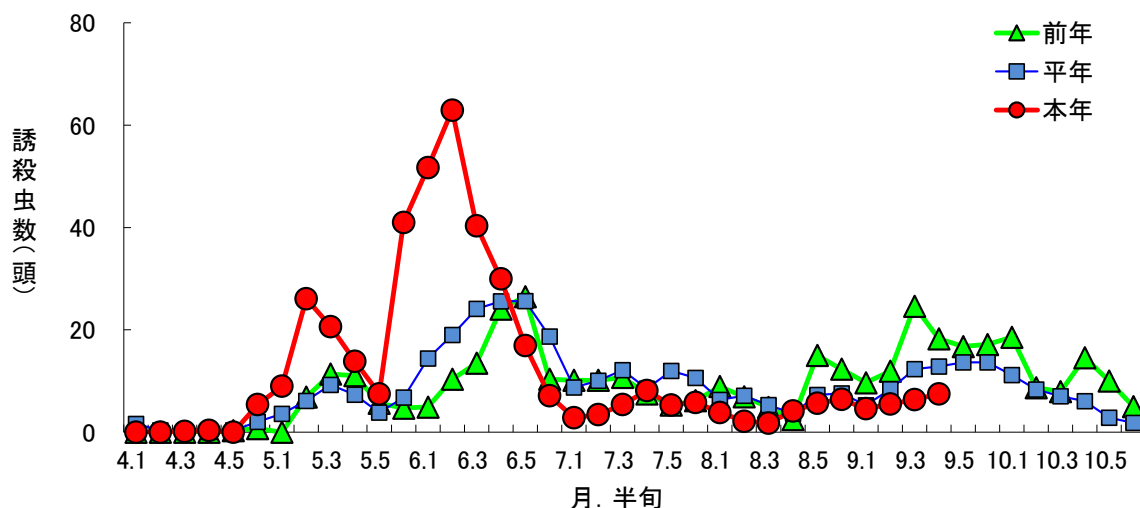


図 2 黄色粘着トラップによるチャノキイロアザミウマの誘殺数の推移 (小城市 果樹試験場調査)

キク

[【概要に戻る】](#)

定期調査：6 圃場

調査日：9 月 14～18 日

1. アザミウマ類 (クダハアザミウマ、ミナキイロアザミウマ、ミカンキイロアザミウマ)

1) 予報の内容

発生量：平年並

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査 (図 1 参照)

発生株率：0% (平年 5.9%、前年 11.0%)

平年比：やや少 (－～±)

(2) 10 月の気象予報

気温は高く、多発生の条件 (＋)

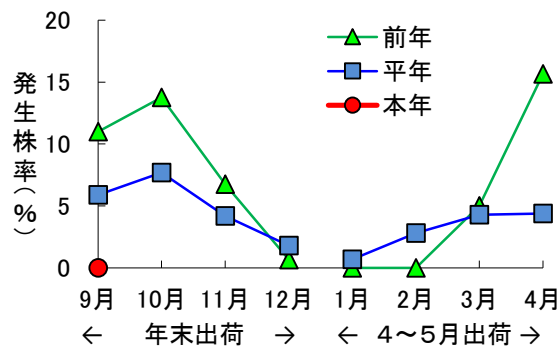


図1 アザミウマ類のキクでの発生推移

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 圃場周辺の雑草は発生源となるため、除草を徹底する。
- (2) 施設内の侵入を防止するために、開口部に 0.4 mm 目以下の防虫ネットを被覆する。
- (3) 発生状況をよく確認し、低密度からの防除を徹底する。本虫は、薬剤の到達しにくい葉裏などに寄生しているため、散布むらがないよう、十分量を丁寧に散布する。
- (4) ミカンキイロアザミウマは、キクえそ病 (TSWV)・茎えそ病 (GSNV) のウイルスを媒介する。発生株を認めた場合は速やかに取り除き、媒介虫の防除を徹底する。

2. アブラムシ類

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査 (図1 参照)

発生株率：0% (平年 0.2%、前年 0.3%)

平年比：やや少 (－～±)

(2) 10月の気象予報

気温は高く、多発生の条件 (＋)

3) 防除上注意すべき事項

(1) 葉裏や下位葉にも薬液が十分かかるよう散布する。

(2) 薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統の薬剤を連用しない。

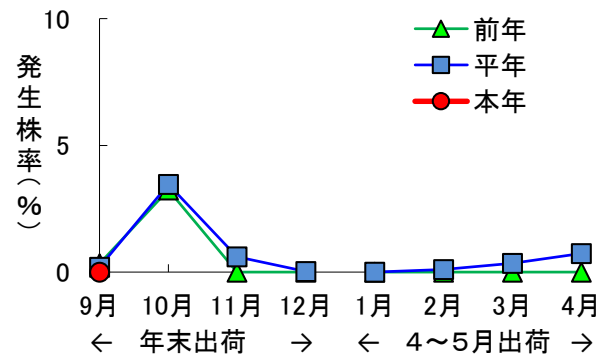


図1 アブラムシ類のキクでの発生推移

3. ハダニ類

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査

発生株率：0% (平年 0.8%、前年 1.7%)

平年比：やや少 (－～±)

(2) 10月の気象予報

気温は高く、多発生の条件 (＋)

3) 防除上注意すべき事項

(1) 葉裏や下位葉にも薬液が十分かかるよう散布する。

(2) 薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統の薬剤を連用しない。

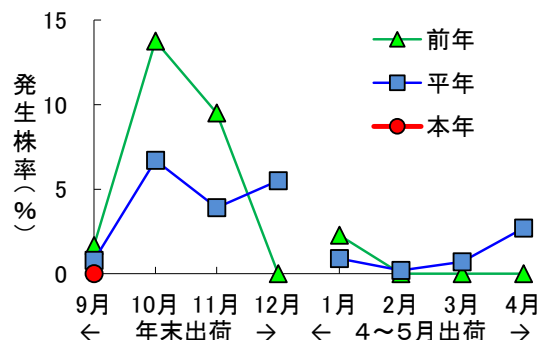


図1 ハダニ類のキクでの発生推移

4. ハモグリバエ類

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査 (図1 参照)

被害株率：0% (平年 0%、前年 0%)

平年比：並 (±)

(2) 10月の気象予報

気温は高く、多発生の条件 (＋)

3) 防除上注意すべき事項

(1) 葉裏や下位葉にも薬液が十分かかるよう散布する。

(2) 薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統の薬剤を連用しない。

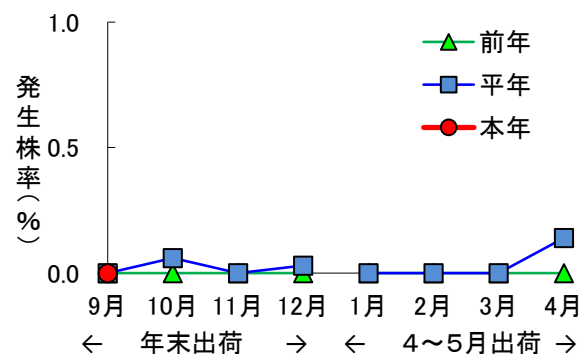


図1 ハモグリバエ類のキクでの被害株率の推移

5. チョウ目害虫

1) 予報の内容

発生量：平年より多い

2) 予報の根拠

(1) 発生の実況

① 定期調査(図1参照)

被害株率：0% (平年 0.8%、前年 0%)

平年比：やや少(ー～±)

② フェロモントラップによる誘殺数

ハスモンヨトウ 平年比：やや多(±～+) (野菜共通、1. チョウ目害虫 図3参照)。

オオタバコガ 平年比：多(+) (野菜共通、1. チョウ目害虫 図4参照)。

シロイチモジヨトウ 平年比：多(+) (野菜共通、1. チョウ目害虫 図5参照)。

(2) 10月の気象予報

気温は高く、多発生の条件(+)

3) 防除上注意すべき事項

(1) 発生程度は、圃場ごとに大きく異なるため、必ず圃場での発生状況を確認する。

(2) 薬剤防除に当たっては、使用方法(収穫前日数等)を遵守し、虫体によくかかるよう丁寧に散布する。

(3) 幼虫は、齢が進むと薬剤の防除効果が劣るため、若齢幼虫期に防除を行う。

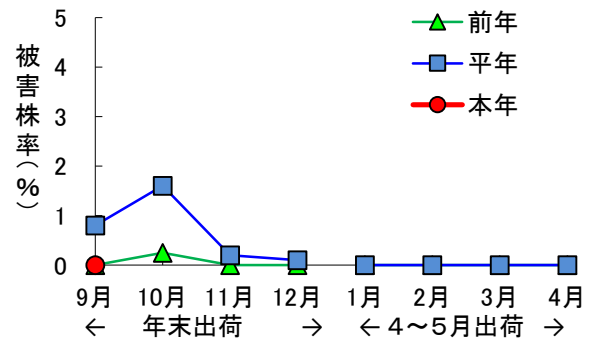


図1 チョウ目害虫によるキクでの被害株率の推移

連絡先：佐賀県農業技術防除センター 病虫害防除部

〒840 - 2205 佐賀市川副町南里 1088

TEL (0952) 45 - 8153 FAX (0952) 45 - 5085

Mail nougyougi-jutsu@pref.saga.lg.jp

ホームページアドレス <https://www.pref.saga.lg.jp/kiji00321899/ind>

